ほどの人気を集め、庶民を非常に楽しませたという。

平成元年3月28日嘉瀬公民館にて

のちにこの人形浄瑠璃が文楽（文楽座の略）という楽屋に収まりその流れを汲むというよりも影響が大きい金太、豆蔵の人形芝居が西津軽郡館岡の野呂粕次郎によって編みだされ津軽の人達を熱狂させたのである。

去る二月の下旬、津軽における現今唯一の人形師として活躍しておられる、五所川原駅前の木村幸八を尋ね、木村さん夫妻のくったくのないお話を聞くに至ったことはこの稿を綴るにあたって全くの幸せであった。

全くの初対面で一観客の立場から木村さんの歩んできた苦楽の人生の一端を師匠の野呂さんの生活史を映しながら聞き書きできたことは誠に有難いことであった。実は私の母も木村さんと同郷の藻川の出身で幼少の頃、私も藻川の渡し船でよく遊んだことから何か相通じる糸が風土の中にあるのではないかとひそかな自負と恥知らずの強引さも手伝って何時間もお話を聞くはめにいたったことは今にして思えば汗顔のいたりである。

人形師　野呂粕次郎

津軽の人形芝居、金太、豆蔵劇を創り上げた野呂粕次郎さんは、西津軽郡館岡村（現木造町）亀ケ岡で小作農兼馬喰の家に七人兄弟の次男坊として生まれた。明治十七年生まれの粕次郎さんでは当時の小作農と云えば極貧もいいとこ今では想像もつかない生活である。親爺が馬喰商売を兼業していたと云えば聞こえはよいが、売買成立の手たたきの部類でせいぜいすすけ酒にありつけるのがやっとの状態で言葉通りの水呑百姓であった。

津軽地方にも粕次郎が幼い頃から人形芝居や、人形を担いだ飴売りなどが行き来して、人形劇を見るたびにいつかは自分も人形遣いになりたいものだとひそかに志を抱くようになった。天性の器用さも手伝って一人で人形を作り、誰もいない所で人形芝居の真似事をしていたのである。小作農の水呑百姓ではいくら働いても底辺から浮かび上がる見込みもなく明治三十五年十九歳の時、巡業に来ていた上方の人形芝居に強引に頼み込んで一座に加わり、遂に故郷をあとにしたのである。しかし肌合いの違う上方の人達との集団生活に溶け込めず、とりわけ言葉の違いなどからわずか一年で一座を抜けだし村に帰った。

ふるさとに帰った粕次郎は今までの経験を基にして、津軽に似合った津軽の肌に合う人形芝居を考案し、館岡人形芝居と銘うって自分の住む村から近隣の村へと芝居の反響をみながら次第に公演の輪を広げていった。これが金太、豆蔵の誕生である。金太は津軽地方で古くから親しまれている金太郎であり、豆蔵は村々を渡り歩く豆蔵語りから貰い受けた。豆蔵語りとはとにかく早口で福をもたらす文句を並べたて金品を貰い歩く門付け芸人で体の良いホイド（乞食）である。

粕次郎が人形芝居を旗揚げした頃、日露戦争が始まり戦勝ムードが高まり勝った勝ったと云われながら農村の暮らしは一向に楽にならなかった。あの村、この村と一人、二人の戦死公報が入り家族の悲しみとは別に社会的には国家の英雄、忠臣ともてはやされ英霊ここにありと称賛された時期であった。

呑んべい金太とちょちょじの豆蔵の二体のあやなすセリフは、時としては世相を嘆き庶民の言いたいことを代弁してくれるようで大変な喝采を博したのである。粕次郎の人形芝居の人気は何と云っても金太と豆蔵が看板なものだから大正三年頃にはそれまでの館岡人形芝居から、金太豆蔵人形芝居と改名しふところ具合も豊かになってきた。

土百姓のおんじが津軽に於て一躍庶民芸能の花形的存在となり、親が名付けた粕次郎という名前を現代用に「英昭」と改名し絶頂の意気込みぶりを見せていた。のちの昭和十三年に生まれ故郷の菩提寺、曹同宗洪福寺に墓を建てて四代目野呂英昭建之とその名前を刻んでいる。

粕次郎は妻帯運には恵まれず五十歳を過ぎてから、東津軽郡奥内村で商店を営む未亡人の黒石すけという女性と内縁関係にて結ばれ生涯の伴侶として芝居に打ち込んだのである。

英昭建之の墓

粕次郎の金太豆蔵芝居のはなやかさに刺激されて津軽にもいくつかの人形芝居が生まれた。農家出身の人形遣いはおしなべて農耕するにも土地もなく余り者の部類で次男、三男の人達である。余談になりますが、貧窮すれど子沢出の型で「オンジとベゴは死んでも惜しくない」という風潮があり、それはあまりにも貧しいがゆえに、明治以来日清、日露と両戦役にも代表されるように戦死すれば国家から遺族の方になにがしかの褒賞金がもらえる。また当時の農家では宗教的戒律から肉をあまり食べなかった。ことに四つ足の動物の肉は家の中に入れるものではなかった。馬は病死してほとんどそのまま土の中に埋めますが、どうしたものか「ベゴ」の肉だけは売ることができた。つまりオンジとベゴは死んでも金になる。だから死んでも惜しくはないという言葉は大っぴらに云われなくても裏の生活の言葉として確実に生きていたのだ。

家父長制の世では長兄と次、三男の違いは同じ兄弟でありながら天と地ほどの格差があり、ことに性悪な兄嫁に使える次、三男は人間のあつかいを受けることができなかった。そういう背景の時代であればこそきらびやかな芸人の生活を夢見て這いあがろうとしたのである。

粕次郎が奥内村に住居を構えていた頃に、現在における唯一人の人形芝居の第一人者である木村幸八さんが強引に弟子入れしたのである。弟子入れしたものの粕次郎は幸八さんを歓迎したわけでもなく当分の間ただ道具運びの手伝いや、粕次郎の操る人形のすげ替えや、出番の終わった人形の後片付け等の仕事の精出しに過ぎない毎日だった。

芸人は一夜成金に、一夜乞食といわれる浮草稼業であれば、不入れの時は野宿するような目にも会うし、大入満員の時は宿につき風呂を浴びながら暖かい御飯をいただくこともある。粕次郎は年を重ねるにつれて気むずかしい性格をあらわにし、公演の予定があるにもかかわらず、一週間も家を空けることがあって殊更女好きとはいわないが芸人にありがちな浮気の虫がはばたく時もあったのだろう。

幸八さんが弟子入れする前にも二、三人の人が弟子入れしたがあまりの気むずかしさと身勝手な行動に共に去っていった。

いまでこそ大成された幸八さんですがここ迄の道のりには、幾多の曲折があった。師匠の粕次郎と同じく小作農家の三男に生まれ明治以来未だ経験したことのない大正二年の大凶作の次の年に生まれましたが、農村は疲弊に喘ぎ小作農家の暮らしは苦しく載星、踏月土を這いつくばい、なめるように働いても楽になるきざしが見えない時代であった。父親の少一は、貧乏百姓の中でもハイカラ趣味があるらしく時たま三味線を奏でる技倆の持ち主で、芸の何であるかは別として音を楽しむ風情を持ち合わせていた。そんな環境の中に育ち始めた幸八は小学校時代から器用さもあって自作の人形を操りクラスの中でも人気者であった。授業中に十本の指を使って人形を動かす動作を始めるものだから先生には大目玉をいただくことも会ったという。

幸八の両親は他の子供と比較して体の弱い幸八は体力の必要な農業は無理との判断から高等科一年を了えた春、四月、五所川原町の鶴屋呉服店に丁稚奉公に出すことにした。当時の学制は尋常小学校六年高等科二年と八年の学制をとっていたが、小学校六年は一応義務教育とし、高等科には進級しても、しなくてもよい自由な制度であった。従って高等科一年で学校を終了しても不思議なことではなかった。裕福な家庭では高等科二年を了えさせることもできたが、貧しい家庭では小学校六年もまともに通学させてもらえなかった。また百姓の生き方として百姓には学問はいらぬという考え方が支配的でただひたすらに働くことを強要される世の中であった。そういう社会的要因の中で小作農の家でしたが高等科一年を了えたことは幸八にとっては恩の字であったろう。

しかし呉服店に奉公したものの軟弱な体質では熱を出して寝込むことがたびたびで一年足らずで家に帰されることになった。生まれ育った家で体調を整え、小作農の次、三男が仙る宿命の借子として三好村村長の家に働きに出された。作業小屋の「マギ」に寝宿りしながら青年学校の前進である夜間の農業補習学校に通い学ぶことと知識を得る喜びに昼の仕事の辛さも忘れるほどであった。借子の契約は一年毎に更改で、又違った家の借子になって働いた。借子生活の喜びは何と云っても祭りである。盆には一週間の休みを与えられ、奴隷のような生活から解放される盆休みは唄や踊りに爆発した。声量の良い幸八は櫓に登り盆踊りの唄や

民謡を唄って娘達の注目を浴びるのであった。

この頃が幸八にとっては借子生活という苦しさがあっても仲間と一緒に青春の血をたぎらせるかりそめの目標があり幸せであった。

借子生活に鍛へられ体力もつき今では一人前の若者として認められるようになった。

昭和六年、それは数年続いた凶作のはしりの年である。猛吹雪、偏東風（ヤマセ）と低温に見舞われみるもあわれな稲作であった。

翌七年には連続した集中豪雨が津軽一帯を襲い、岩木川下流の大小の河川が氾濫し、出穂直前の稲が泥に埋もれた。中央では軍部、右翼がのさばり思想統一がはかられ自由なき暗い世相へと坂落しの石のような勢いで進められていた。

水害の常習地帯である藻川といえば何か暗い感じを抱くのである。それは私にとって小さい頃、豪雨の度に母が生家にいた頃よく水害にあったという話を聞かされたことによる。また藻川の人達は一種独特の言葉のアクセントを使用する。今でも藻川育ちの人と初対面でもあなたは藻川の人ですネと当てることができる。そういうなじめない言葉がいつか拒否反応を通り越して暗さというイメージに密着してしまったのだ。

弥三郎節の八番にでてくる歌詞の一節に藻川の林コさも陽コ照らね、の藻川の林は「タモ」の木「柳の木」の大木が林立し昼なお暗い様相でお化けの住家のように感じられたのである。

幸八は借子生活の時代でも人形芝居の練習を暇を見つけては続けていた。はたちの春父の少一はアッと云う間に脳溢血（アタリ）で他界した。翌年四月ようやく借子の年季も明け骨休みしていた頃、思いがけなく後の師匠である粕次郎から金木町の観桜会で人形芝居を公演するから手伝ってほしいとの手紙を受け、これがきっかけで人形芝居の道に進むことになったのである。これが昭和十年で野呂さんにおいても数年続いたケガジのため不景気で興行を中止していたが、人形芝居再開の緒口になった。

旅廻りの芸人として野呂夫妻と一しょに公演を続けながらも、いつしか戦争という暗いかげが身近に忍びより、届出制から許可制に変り、公演直前になって突然警察から中止命令が出されることにもあって、許可証を貰い直す交渉をしたり、時としては台本を書き直して許可を貰ったり観客の不入りの辛さとは別に苦しいことがあったとしみじみと木村さんは述懐する。

この頃になって師匠の野呂さんは体力が衰えて幸八さんが芝居の半分をこなすようになり、金太、豆蔵の人形を操りりっぱな人形師とまでに成長していた。昭和十六年人形師として一世を風靡した野呂さんでしたが公演が終わる間際に倒れて床に伏せること十日でこの世を去った。

故郷の菩提寺に墓碑を刻んでからちょうど二年と六か月で自らの身を五十七歳の生涯を持って墓石の中に埋めることになったのである。

師匠が亡くなった年の十二月八日ついに日本は太平洋戦争に突入した。師匠の遺産を継いで人形芝居の公演に心血を注いでも、周囲は負けられません勝つでは、との意気込みよろしく娯楽は二の次に追いやられ、次第に公演の宿を貸す所も少なくなり、人形芝居を断念せざるをえなかった。魚の行商、軍隊生活、敗戦による中国での捕虜生活、復員後の行商とここ四、五年の間に目まぐるしく変転して人形に思いを馳せながら手を触れることはできなかった。ようやく世の中も落着いた昭和二十二年頃、昔の興行者の伝手を頼って津軽南部地方で再出発したのだが、食糧事情は一向に好転せず、インフレに悩まされ、旧軍隊の演習場であった

山田野へ開拓農民として入植した。

入植時期に次々に公演の依頼があり、代償として米あり、炭あり、藁ありで他の入植者と比して生活は楽になってきた。公演回数が増すにつれて山田野の開拓地では不便をかこつものだから、思いきって巡業公演に出かけるに便利な五所川原の駅近くに空家を見つけ、結婚してこのかた始めての我が家に感慨無量にむせるのであった。この地を足がかりに近くの村から村へと興行先をのばし県内はもちろん、秋田、北海道と範囲を広げて行くが、興行師の契約不履行によってやっと帰って来たこともあると云う。

映画全盛期には映画に押され、テレビが各家庭に入るに従って潮が引くように人形芝居の人気が衰えて行くのを幸八は信じられない思いでいたが、時代の流れは抗うことのできない潮流となって、今さら人形芝居かと誰も返り見てくれなくなっていた。昭和三十六年幸八は淋しさに耐えられない思いをしながら職業としての人形芝居を断念しなければならなかった。

五所川原市内の鶴又薬品会社に勤めることになったが、四人の子供を抱えては会社の給与だけでは間に合うわけではない。幸いに社長は人形芝居の仕事がある時は休みをくれたのでどれだけ家計が助かったかわからないと木村さんの奥さんが当時を思い出して語りかけてくれたのが印象的であった。

薬品会社の定年は五十五歳である。これといった手職のない幸八には五所川原市内では職はなかった。やっと捜した仕事は青森市のある病院の夜警であった。一家は青森市に移り住むことにした。長かった人形芝居、金太、豆蔵とも今度こそは「サヨナラ」しなければならないと覚悟しても過ぎし日の人形芝居が走馬灯のように頭をよぎり、辛いことも、悲しいことも哀しみの苦渋で終わることはちょっぴり淋しかった。。

しかし幸八にとって人形芝居は終わりでなかった。東京の人形劇団が、「昔なつかしい人形劇の再演」というかたちで、幸八が操る金太、豆蔵がテレビの電波にのり全国に紹介された。またＮＨＫ、宮田輝司会のふるさとの歌まつりにも再三紹介され一躍今迄と違った意味で有名人になった。

都会でも田舎でも意外なほどの大きな反響に驚いた地元の五所川原市でも幸八を放っておけなくなった。市役所の文化係の人が幸八を訪ね、市の文化会館の管理人として、伝統芸能の継承に務めてほしいとの申し出に、また好きな人形劇に専念できると喜びにふるえるのであった。

昭和四十七年、津軽人形芝居金太豆蔵一座は市の無形文化財の指定を受けた。

師匠、、粕次郎から受け継いだ人形芝居は時代の荒波にさらわれ、二度、三度ととぎれても不死鳥のように蘇るのである。

私たちの部落にも、金太、豆蔵の人形芝居が戦前戦後とたびたび公演に訪れた。裸電球のもと村びと達は絶妙な人形の動きに我を忘れて感動の世界にひたるのである。昔の百姓は金の出ずるを極力抑え、自給自足を旨として暮らしたものだから木戸銭は大方藁である。大人は四まろ、子供は二まろで一夜の公演で荷車いっぱいに藁が集まる。その藁を換金して公演料に充てるのだが大した金額にはならなかったろう。農村では藁、漁村では乾物と相場がきまっていて、時としては米、炭、と生活物品ならなんでもよかった。そういうつつましい木戸銭を集めながら、粕次郎、幸八は津軽の偉大な人形師として後世にも語り継がれてゆくであろう。

声の良い幸八とて寄る年並みには勝てず、ここ二、三年前から声量がめっきり落ちて自分ながら容易でなくなったという。それでも一年に三十回の公演をこなし観客を喜ばしてくれているが、直系の後継者がいないのがなにやら淋しそうである。幸八の操る人形芸は超一流でも現代の感覚から指向して何かもの足らなさを感じる。レパトリーは二十位あるそうだが、現代用にアレンジした芝居、たとえば、ロッキード事件、リクルート汚職と日本の最高権力者のつまじきの姿を、金太と豆蔵に語らせたら最高の出来ばいになるに違いない。

終わりに金太の入婿ドラマのセリフを紹介しますが、これは津軽における最大の落語である。

「おい豆蔵、お前みたいな碌でなしは喋っても仕方ないけどよ、嫁っこずものはええもんだ」

「金太、お前、婿になって、たった四日で出されたんだってな」

「おら、酒好きだどごでよ、婿になってまれば酒も飲まれねべ」

「うん」

「それで今のうぢに飲んでおこうと思って戸棚っこ開げてみだ」

「うん」

「そしたら、まだ口取りの酒っコ残ってあった。こっそらど隠れで飲んでいだら見つかってしまった」

「ほほう」

「この婿、身上つぶしてまるはで、今のうぢにのめくてまれだど」

「それで出されたのが」

「見事に出されだ。俺がその家がら出てくる時よ、嫁のその人が泣いで手を振るんだよ、あんたぁ、あんたぁって」

「うん」

「それでおらも立ぢとまってこう云った。おら、あんたでねえ、金太だあって」

嘉瀬公民館にて（平成元年３月28日）

津軽方言詩

沢田　薫

ぶどうの候

ぶど棚の下で
日焼けした　わらし
上見で　下見で　瞳ギョロギョロ
「コラー」
いずまで食ってるだば
唇　紫ぐして

秋っ腹

秋の腹サ
ホイド入ってるてィ
このわらし、
西瓜食って
甜瓜食って
黍糞たらして・・

馬がかりと村がかり

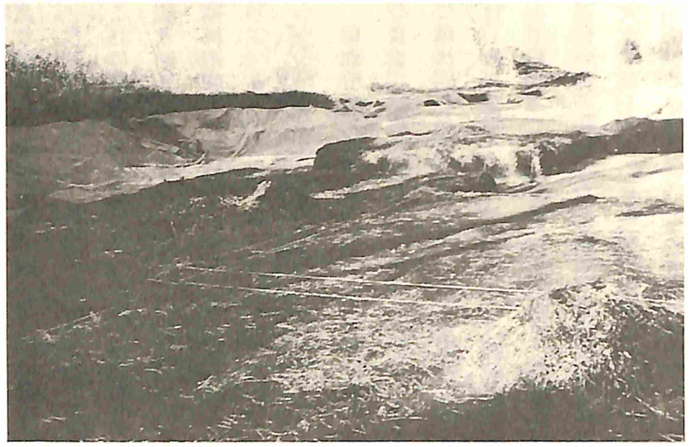
人の言葉を聞き違い、夫婦げんかの起りしは、第四大区二小区大然村のものとて四十余りの男なりしが、夫婦打ちそろい、クワを肩にし畑にいでかせぎおりしが、たいてい正午とおぼしころ、食事せんとて手足を洗い休みしが、夫はふと情をきざし、ぼっぽつ押さえかね、いやがる（口の先では）女房を言いなだめ、ついに馬懸かりの和合講。拍子なしのだんまりとなり、駆けつ転びつ畑中で首尾よくしまい、この勢いで今ひとかせぎしが、女房は先に帰りて夕飯の支度にかかりしところに、村用掛（かかり）より、村懸かりの銭を取りに来しを、ほてりもさめぬことなれば、馬懸かりと聞きたがえ、顔はたちまち赤くなり、恥ずかしそうに言い訳しかば、次の回とて使いの人帰りしが、そのうち夫も帰りたれば、そこで女房が腹立ちかねて、お前は年にも似合わぬことをなせし故、村用掛が聞きつけて、その税金を取られて恥をかくとは、みんなお前の仕事だと、一つ二つ言い募り、大げんかとなり、ついに三行半（みくだりはん）となりしが、それではならぬと村中の老人どもが中に入り、まずまず和合講も無事に取りましたと。馬懸かりの話は、馬鹿な話じゃと探訪者（たねとり）が聞いてきました。

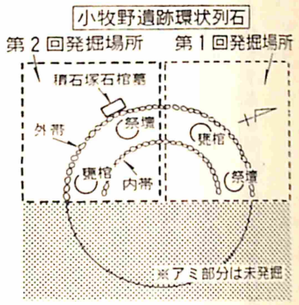
（明治10・7・26、北斗新聞）

注＝第四大区は西津軽郡。

小牧野遺跡雑感

木村治利





県内外の歴史探訪は、毎年一、二回実施しているので県内の史跡めぐりは、おおむね完了済と考えていたが、案外近隣市町村の史跡探訪が行われていないことがわかった。

今回の予定は、最近発掘調査された青森市野沢、小牧野遺跡の環状列石（ストーンサークル）の発掘調査場所を踏査することにした。

小牧野遺跡の発掘調査で出土した縄文時代後期のものと見られる環状列石は、極めて考古学的価値の高いことが確かめられ、全国的に有名な秋田県鹿角市の大湯ストーンサークルと双璧となる規模と個性を持っているということである。

小牧野環状列石踏査が午前中で終り、時間があるときは棟方志功記念館を見学することにした。それは第三回県内所蔵者作品展が、十月一日～十一月二十九日までとなっており、津軽民謡の祖、黒川桃太郎こと「嘉瀬の桃」の地蔵原画が展示されていないかという期待感があった。

午後は、弘前市に転換し、主として旧住宅「石場家住宅」「仲町の伝統的建造物群保存地区」「旧伊藤家住宅」など五時まで見学、六時から忘年会にのぞむことになっていた。

平成元年十一月二十六日午前八時、沢田政孝、外崎三千男、沢田薫、秋元惣之進、原田万治、木立久二、木村治利の七名を乗せ、沢田政孝さんの運転で出発した。車は順風満帆で走行する。車の乗心地は五〇％は偏に運転手にある。その点、沢田さんは運転歴四〇年、この間、無事故、無違反の優良安全運転手である。

眼前に拡がる岩木の峰は白いながらも、うららかな小春日和で、皆嬉々として解放感に溢れていた。

ふと、四〇年前の軍隊を思い起こしていた。昔の海軍生活を語るとき、マル秘「兵須知」がある。下士官兵の生活を裏から描写して、まことに妙を得ているので、その口伝の一部を披露する。

「—兵とは、おおむね貧家の二男、三男にして、粗食によく耐え、平時にありては重量物運搬に適し、戦時にありては準士官以上の弾除けと

なり、尽忠報国の念すこぶる厚きも、教育程度はなはだ低くして新聞を読み得ず、年四回の祝祭日に銀飯と紅白の餅を与えれば、まず遙か東方の洋上を拜し、君が代を唱したる後、万歳を三唱して嬉々としてこれを貪り食らい、その余すところ知らざるなり。

たまたま上陸し、街路にて婦女子と出会うときは奇声を発す。されど、これに危害をくわえること、さらになし。これも多年にわたる訓練の賜物というべきなり。しかるに、兵に一滴のアルコールを与えんか、恰も密林の虎を野に放てるごとくその狂暴限りなし―」

小牧野遺跡の環状列石

青森市野沢に入り、野沢小入内分校前を過ぎるとすぐ左に折れ、山道を登る。紆余曲折し、山奥へと進む。始めての道路なので「こんな山奥に環状列石があるんだろうか」「道路を間違えたのでは……」など車内は心細い空気が漂う。農作業の人が散見する度に車を止め、畑の中を走って尋ねる。わからない人が多い。連絡係は原田万治さんである。山田高校の葛西教諭からある程度の道順は聞き、冬が近いので発掘場所には大きなシートをかぶせてあるからと云われていた。

知っている人がいた。畑の向こうで原田さんが手を振っている。本道路から左側に曲がり、少し行くと突当たると云う。シートに包まれた発掘場所があった。

発掘調査は、四月下旬から五月中旬と、七月下旬から八月中旬までの二回行われ、二重の輪を持つ環状列石の跡地半分が姿を現していた。外側の列（外帯）は直径三十四メートル、内側の列（内帯）は直径二十八メートル前後と推定されている。

「環状列石は普通、一つの石組みを作るとそれにつなげる形で無造作に拡がっているが、小牧野の場合は最初に建設計画を立て、整地した土で建設したように整然としており、縄文時代の文化が高度に発達していたことの裏付けとなる」と現地を訪れた小林教授（国学院大）は語っている。

外帯と内帯の間に、交互に等間隔で並んだ二つのかめ棺と二つの石の祭壇が見つかった。さらに二回目の発掘では祭壇の上に積石塚棺墓という土葬に使われる墓石も出土している。

環状列石はこれまで、墓ではないかとみられていたが、確証がなく、使用の目的は、はっきりしていなかった。小牧野遺跡ではこの環状列石が広場と墓を兼ねていたとみられる遺物が続々と出ており、環状列石研究の貴重なデーターとなりそうだと語り、来年には残り半分の発掘調査が行われる予定とのことである。（東奥日報）

環状列石は、何の目的で建設したか

昭和三十一年、国から「特別史跡」に指定された秋田県大湯環状列石にも、私達は二、三度足を運んだことがある。大湯環状列石は数千年前の縄文式文化時代につくられた宗教に関係のある遺跡だと考えられている。大変珍しいもので、「特別史跡」に指定されることになった。

特別史跡というのは、重要文化財がもっと特別に保護されなければならないので、特別指定となるのであり、国の宝でもある。「特別史跡」は、全国で彦根城と環状列石の二つであると聞いている。

日本の歴史が石器時代から始められるようになった今の時代では、この石器時代の文化がいかにすぐれていたかということを、内外に知らせ

る上に大湯遺跡は最も適当であり、最も意義あるものと云われている。

日本の歴史は旧石器時代から始められたが、前期、中期、後期の三つに区分されている。

前期は、百九〇万年～八万年前、中期は、八万年～四万年前、後期は、四万年～一万二千年前までである。

日本列島に人類が住み着いたのはだいたい三万年前、その頃は、日本は大陸と地続きで列島になっていなかった。

二万年程前ウルム氷期の最盛期で、日本アルプスや日高山脈は氷河におおわれ、海面は現在よりおおよそ一〇〇メートルほど低く、日本列島は陸橋によって大陸と結ばれていた。

むつ湾の深さは、一千メートル前後であるからそのころは小さな沼沢などが散在する湿原で象などの住む格好な場所であったろう。青森ナウマン象の化石が青森県で発見されているのは当然であろう。

最近歴史ブームで、新しい歴史書がつぎつぎと出版され、確かに最近の歴史学とか考古学は、新しい日本の石文化を究明し、多くの収穫をあげている。今後ますます科学的な歴史学によって究明され実証されていくに違いない。つまり遺物、遺跡は文献、記録に優先し、これからも信頼できる資料として生きてゆくであろう。

これまでの東北といえば、文化の最もおくれた地、野蛮人の住むところといわれていた。しかし、縄文時代は日本の中でも最高の文化をほこっていたことが亀ケ岡式土器、是川中居遺跡によっても明白となった。

小牧野遺跡の環状列石は縄文時代後期のものといわれる。今から四千年ほど前であるが、古代人はどのような生活の営みであったろう。

小牧野遺跡は丘陵地にある。そして沢山の石がある。石は古代からあの付近だけにあったのだろうか。川原から拾い集めてきたのだろうか。墓石には、何も手が加えられていないのだろうか。

古代人は自然石を使用して、その生活の営みのうちに科学的に文化的に特にある目的を以てこれを建設した事実は認めなければならない。

即ちそれは何らかの意図を持っていたということになる。単なる野蛮人の気まぐれではない。

環状列石は、墓なのか、祭祀神仰的なものなのか、はたまた、縄文式、弥生式という文化時代のほかに環状列石時代があったのかも知れない。

環状列石は、いつごろ建設されたか

土器や小さい自然石、貝塚、遺骨、遺物などは研究が進み、その年代は種々測定方法はあるが、今では放射性炭素によって測定されている。それは、必要な材料が容易で、かつ豊富であるからだといわれる。

資料によると、この方法は、昭和二十一年（一九四六）シカゴ大学原子核研究所のリピー博士によって発明され、天然に存在する原子量14Cの炭素が短命なうえ、その崩壊が規則正しい放射性元素であることを利用したものである。植物が死ねばその瞬間から空気中の炭素補給が止まり、その植物体を構成する14Cの含有率は崩壊の一途をたどる。この崩壊する14Cの平減期は国際協定により五五六〇年とされ、現在からの逆算年数は一九五〇年を基準とすることになっている。

したがって仮に五五六〇年前に死んだ植物の炭化物が遺跡から出土したとき、その炭化植物の炭素中の14Cは現在の植物の炭素中の量の半分に減ってきているということになり、その年代を算出できるのである。

しかしこの方法で測定できる年代はおおよそ四万年ぐらい前までである。